

第二期 第八十八号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2023. 11. 10 定有堂書店 発行

天上大風

たった三つの「見えざる手」

ルールを守る日記

悲しい歌にこそ、鼓舞される

本を作る側から (8)

汽水のほとりから (32)

沈みつつある国のほとりで

背と腹の話

鳥取あれこれ その八十七

八代日記 (四十三)

遠い「他者」を思う

アニバーサリー

奈良 敏行

岩田 直樹

鳥居貴彦

木元 健二

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

ドラメリア

…… 編集後記



天上大風

奈良 敏行

(定有堂 主人)

八月、定有堂閉店手続きで来訪した日販の人と交わした雑談で、印象に残ったのは、鳥取県米子市に「無人書店」ができたという話題だった。

これからの町の本屋の将来だが、家賃と人件費がいらないければいつまでも続けられる。これは小さな世界ならではの小回りの有利さなのだが、大きな世界がそこに着眼し取り組んでくることに驚いた。

図書館に自動貸出機が登場したときも驚いた。ユニクロで自動精算レジを見たときも戸惑った。それ以来行かなくなった。最近に行きつけの百円ショップがなくなったので、別の百円ショップを探していつてみたら、自動精算レジだったので複雑な気持ちだった。持続するために「人」を排除しなければならぬ時代が加速化している。

本屋を始める前まで勤めていた郵便局はモデル局と称されていて、郵便物自動仕分け機がいち早く導入された局だった。大混乱が収まった後の入局だったので騒動につい

ては直接体験していない。しかし暗い眼をしている人が多く不思議だった。機械が人の仕事を奪い、それだけでなく人を分断していくのを目撃した。

現在の動向はしかし何かが違う。反対するも何もレジが初期設定として自動になったから「人」が不要になった、それだけの出来事ではない。持続するためには「人」を消していかなければならない。この「持続」はいったい誰が望んでいるのだろう。

郊外型書店の進出が規制の事実になってしまった二〇〇〇年ころ、海野弘の『ハイウェイの誘惑』を読んで魅了され、その後も何度も読み返している。副題には「ロードサイド・アメリカ」と付されている。どこに感動したかという、一九六〇年代にアメリカではすでに、郊外店というビジネスモデルが崩壊しているという話だったからだ。少し愉快だった。この失われた「商い」の記憶を、海野は「コマール・シャル・アルケオロジー」と呼んでいる。

「商い」は最初通りをはさんで商店街として栄える。西部劇など店の前に馬をつないでいるのを見かける。これもロードサイドの原型なのだろう。往來に店舗が生まれるということだ。やがて車が大量生産され高速移動するのでロードサイドも長くなる。途中に移動する食堂「ダイナー」が続々生まれる。ほとんどが「ママ・&・パップ・ビジネス」

だ。つまりパママストア、家族経営なのだ。やがてスーパーハイウェイができる。これが最終形態だ。超高速道路で都市を迂回する。都市の賑わいも消え、ロードサイドに店舗の余地もなくなる。車が停止するのはドライビンだけだ。高速道路にロードサイドは存在しない。二点間を結ぶ「橋」なのだ。

「人」が輝くのは接客の場だと思う。この『ハイウェイの誘惑』につきのような場面がある。ドライビンのファストショップに「シヴィルズ」という店があった。一九四〇年に全盛期に入り、五百台の駐車場を所有した。客は車を停め注文とりにくるのを待ちそして受けとる。その運び手を「カーブ・ガール」という。華やかな仕事なのだ。

《しつても厳しく、いつも笑顔で、背筋をピンとのばし、メニューを暗記し、売り上げをのばさなければならなかった。また内部規則として、カーブ・ガールはお客に触れてはならなかった。お釣りは、手渡しでなく、トレイにのせるのである》

要は運ぶだけの仕事だが、誇らしい仕事だったのだ。更に驚くことがある。

《厳しい審査で選ばれたシヴィルズの美女たちは注目され、ハリウッドにスカウトされる娘もいた。たとえば、ケイ・ウィリアムズは、クラーク・ゲープルと結婚した》

『ライフ』の表紙を飾るジョゼフィン・パウエルもいた。ハリウッドスターと同格なのだ。

昔本屋の師匠柴田信さんは「最前線はレジだ」といった。接客の最前線という意味でもある。後はみんなロジスティクス（兵站）なのだ。簡明でとても健全な思想だ。ふと「無人レジ」は戦場のドローン化なのではないかと思った。

本屋を考えるとときにバイブルにしていた山口昌男の『歴史・祝祭・神話』には、「遊戯」というものの大切さが語られている。人と人との接触には「遊戯」が生まれる。「接客」は遊戯なのだ。そしてそこでのやりとりは「人間の世界感覚を活気あるものにする」。山口昌男の言いたいのは「バサラ」の精神の不可欠さだ。ファーストフードの店員とハリウッドスターの結婚なんてとてもバサラな出来事であり、「仕事」であつたと思う。

「仕事」が偉いのではなく、「人」が偉かった時代の記憶の一つだ。

「無人書店」はこれからどこへ向かうのだろう。

2023.10.17

海野弘の『ハイウェイの誘惑』

山口昌男の『歴史・祝祭・神話』

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

11月21日 火曜日 19時から

テキスト ラフォルグ『怠ける権利』平凡社ライブラリー

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

（講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授）

12月14日 木曜日 19時から

テキスト 渡名喜庸哲『現代フランス哲学』ちくま新書

副読本・檜垣『ベルクソンの哲学』講談社学術文庫

太極拳教室（会場 定有堂二階・他二カ所）葉香クラブ

毎週 水曜 19時半から・土曜 13時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

三段 公認B級指導員

定有堂教室 「読書室ビオトープ」小説を読む会です

11月16日 木曜日 第7回 19時半から

テキスト 筒井康隆『残像に口紅を』新潮文庫

岩田直樹『橋田邦彦・現象字・アーレントの再解釈』

—生活世界における公共性と倫理— 小取舎 2023

一八〇〇円本体

橋田邦彦・現象
字・アーレント
の再解釈

岩田直樹

小取舎

定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)



奈良敏行十三砂慶明『町の本屋という物語』

作品社 2024年1月刊行予定

町の本屋
という物語

定有堂書店の43年

Nara Takahiko

奈良敏行 三砂慶明：編

鳥取の定有堂書店は、なぜ日本中から書店員が足を運び、本好きや本屋好きの「聖地」となったのか。1980年に開店し、2023年に惜しまれつつ幕を閉じた名店の店主・奈良敏行の43年間の言葉。

定有堂書店の43年
町の本屋という物語
奈良敏行

作品社 定有堂書店の43年 町の本屋という物語 奈良敏行 三砂慶明：編



【内容紹介】

鳥取の定有堂書店は、なぜ日本中から書店員が足を運び、本好きや本屋好きの「聖地」となったのか。1980年に開店し、2023年に惜しまれつつ幕を閉じた名店の店主・奈良敏行の43年間の言葉。

作品社 定有堂書店の43年 町の本屋という物語 奈良敏行 三砂慶明：編

たった三つの「見えざる手」

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授

（「読む会」選書人）

まさか、その後の世界を大きく動かした言葉が三回しか登場しないとは。専門家には常識だろうが、私にとっては驚愕の事実（史実）だった。

今年六月、NHK・Eテレ「100分de名著」でナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』（原著二〇〇七年、岩波書店二〇一一年、全二巻、以下『ショック』）が取り上げられた。出演・解説は政治経済分野のジャーナリスト堤未果である。

五月末に『堤未果のショック・ドクトリン—政府のやりたい放題から身を守る方法』（幻冬舎新書）を上梓したばかりで、NHKを利用した本の売り込みかと邪推したが、日米歴代政権の「やりたい放題」が忖度なしに語られ、腹立たしくも実に興味深い番組だった。早速、猛暑の七月に『ショック（上下巻）』を読む。

ミルトン・フリードマンはニクソン政権に取り入り、チリ人の「シカゴ・ボーイズ」（シカゴ大学で学ぶ弟子たち）を本国に送り込む。CIAが暗躍し、一九七三年

九月一日、アジェンダ社会主義政権はピノチエト將軍のクーデターによって崩壊。大統領をはじめ多くの市民が虐殺され、翌日には、シカゴ・ボーイズ作成の分厚い経済政策案が、中央官庁の机上に置かれていたという。

公営サービスの民営化、生活必需品の価格統制の完全撤廃、国内市場の海外企業・投資家への開放、等々。チリは他国籍企業の草刈り場と化し、翌年にはインフレ率が三七五％に上昇。国内企業はバタバタ倒産し、ゆりかごから墓場まで民営化され、すべてが「自己責任」になっていった。

『ショック』の一番の肝は、新自由主義の帝王フリードマンの悪業？をこれでもかと事細かく描いた点にある。後年、「社会的共通資本」概念を提唱した宇沢弘文が、シカゴ大学のかつての同僚フリードマンを厳しく論難したのも理解できる。

代表作『資本主義と自由』（原著一九六二年、日経BP社二〇〇八年）にはサッチャリズム、レーガノミックス、小泉政権以降のお馴染みの政策が並んでいる。私が生まれた年に書かれたとは思えず、現政権が言い出しても不思議ではない内容だ。そうか、こんなふ

うに私たちは新自由主義の罫から抜け出すことができなくなり、しつかりと飼い馴らされていったのか。

ネットにはフリードマンを「現代のアダム・スミス」と論じる記事もあるくらいだから、クラインが「今日の新自由主義の父祖アダム・スミス」（上巻三四一頁）と書くのは無理もない。

『ショック』を読み終えてから一ヶ月ほど経ったときだろうか、何気なく本棚を眺めていると、堂目卓生『アダム・スミス―道徳感情論』と『国富論』の世界』（中公新書、二〇〇八年）が手招きをするではないか。『読む会』第二期第一六二回、二〇一一年八月三日の案内ハガキが挟んである（第一期と合わせて通算二八七回目）。思い出した。そういえば、アダム・スミスはもともと哲学者であり、その応用編が『国富論』（一七七六年）であったことを。

それから一ヶ月半、『道徳感情論』（原著一七五九年、日経BPクラシックス二〇一四年）、『国富論』（上巻）（日本経済新聞出版社二〇〇七年）、ノーマン『アダム・スミス―共感の経済学』（原著二〇一八年、早川書房二〇二二年）、フィリップソン『アダム・スミスとその時代』（原著二〇一〇年、白水社二〇一四年）

の全二六五〇頁を、仕事の合間に取り憑かれたように読み続けた。

「見えざる手」の使われ方は次のとおり。『道徳感情論』四〇一頁、『国富論』下巻三一頁では、「見えざる手」が人間の意図していなかった目的（社会の繁栄）を達成する文脈で。遺稿『天文学史』では、自然現象が起ころのは気象現象を司るローマの神ジュピターの「見えざる手」によってではなく物理的な外力によってである、という文脈で。「神の見えざる手」はどこにも登場しない。

イギリスの現役国会議員ノーマンはアダム・スミスにまつわる五つの神話を詳しく検討し（神話一〜四はここでは省略）、神話五「アダム・スミスは経済学者である」を論破する。彼は哲学者であり、本人自身もう考えていた。経済活動は、政治学、心理学、社会学、倫理学などから切り離された営為ではなく、さまざまな分野を包括した「人間の科学」の一分野に過ぎなかった。

後世の論者たちは、アダム・スミスの思想を断片的に都合よく取り上げ、自論の権威づけに利用した。「新自由主義の父祖」と言われていることに、草葉の陰で呆れ果て、怒っているに違いない。

ルールを守る日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

大学生の時に住んでいた寮には厳しい規則がたくさんあった。まず一回生は廊下で誰かとすれ違うとバカでかい声で挨拶しないといけない。みんなが「こんちはー!」と絶叫していた。うるさくてしょうがない。喉を潰す奴もいた。それでもカスれた声で叫び続けていた。なんでそんなことになったのか。寮には二百人くらいが暮らしていた。最初の頃は誰が住んでるか顔もわからない。でかい声で挨拶しとけば規則を知らない奴が入ってきたらすぐわかる。特に夜。消灯時間を過ぎると廊下は真っ暗になる。当時はドアにも門にも鍵がかからないガバガバのセキユリティだったので誰でも忍び込むことができた。「こんばんはー!」と絶叫されたらドロボウも逃げ出す。暗闇のでかい声はこわい。それが「こんばんは」だったとしても。炊飯器は廊下で使うということという規則もあった。廊下のコンセント

には炊飯器が常に五、六個つながっていて、寮の食堂が7-
休みの日にはもくもくと湯気を立てていた。漏電とかし
ないんだろうかと思いつながら文字通りのタコ足配線を眺め
ていた。理由は「共有部分の電気代は大学持ちだから」だ
という。居室で電気代がかかるものを使ったら寮生の光熱
費が上がってしまう。炊飯器は電気を食うと言うことを四
年間で学んだ。あと、炊いた米を保温したまま一ヶ月くら
い放置すると紫色の酒ができると言うことも知った。味は
知らない。たいていの規則には理由があった。はじめは訳
もわからぬまま強制されていたが理由がわかると苦ではな
くなる。最後までわからない規則もあった。一、二回生は
風呂場のライオンさんを超えてはならない、とか。今でも
全然意味がわからない。

一人暮らしをしていた頃、アパートの下に住んでいたお
ばあちゃんはいつも十個入りの卵をスーパーで買って六個
を僕にくれた。「食べきれへんから」とおばあちゃんはい
つも言う。こちらが六個入りのん買えばいいのに、と言う
と「ええねん」とちよつと怒ったように帰っていく。もら
えるものは気持ちよくもらう。それが楽しく暮らすための
ルールだった。いま、アパートの前を通るとおばあちゃん
の家の表札は知らない誰かのものになっている。

二、三歳の子どもにルールはあんまりない。靴を左右逆に履いていたって気にしない。五歳にもなると守らないといけないルールが多くなる。だがほとんどの場合、理由をわかっていない。ご飯中に踊らない、とかね。理由をわかっていないので守れない。拗ねる。泣く。自分でルールを作ることでもできるようになる。「トイレの前にズボンがあつたら覗いてもいいで。でもなかつたら覗いたらアカンしな」とか言う。守らなかつたら怒られる。

「傘は誰のものでもない」という勝手なルールを高校生の時につくっていた。大学生になると自転車もそれに加わった。良い子は絶対に真似しないほうがいい。

十月から妙なルールができた。インボイス制度というらしい。近所の税理士事務所に勤めている人に聞いてみる。「説明会しても税理士がうーんて宙を見上げる時間がありませんね頻繁に」と言う。出版社や図書カードの会社から手紙が来る。全部違うことが書いてある気がする。「おたくに影響あるの?」と言う人もいる。「登録しないなら今までの条件変えさせてもらいますね」と言ってくる会社もある。同業者はみんな迷っている。怒っている人もいる。

登録方法はわかる。登録したらどうなるかもわかる。なにが変わるかもよくわかる。ただなぜ今こんなものがはじまるのか、根本的なところがわかっていないのでルールにのれない。のらない。

五歳児の親は入学準備のために小学校へ行くことになっているらしい。急に封書が来て、急に呼び出される。仕方ないのでスリッパを履いて廊下をペタペタ歩く。「廊下を走ってはいけません」と大きな字で書いてある。時代が変わっても変わらぬルール。自分はいま小学校にいるのだと実感する。そして、いつまでも注意書きをしないと廊下を走ってしまう進化しない人類にちょっと安心する。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町818

悲しい歌にこそ、鼓舞される

木元 健二

(新聞記者)

またか、と感じつつも気になるニュースである。

ビートルズの「最後の新曲」として、ジョン・レノンが残したデモ音源をもとにした「ナウ・アンド・ゼン」が今月、売り出された。最新技術でレノンの声を鮮明にのみがえらせて。ベスト盤として知られる「赤盤」「青盤」も二〇二三年ヴァージョンとして編み直され、この新曲が織り込まれたのだとか。

ビートルズのファン歴四十年の私はずっと、こうした「新装盤」を買い求めてきた。聴いてみるときほど驚きはなく、軽く落胆している。なのに、今回もまた新譜を聴いてみた。気持ちを抑えられない。

二百数十曲とされるビートルズの曲のうち、私が歌詞を覚えているのは実はほんのわずかである。意味は訳を通じて大方知っているのだが。彼らの曲を心から理解しているのか疑わしい、と省みるところがある。

それでもある種、散財するように新譜を買い求める。この学ばない五十三歳は、ビートルズのどこが好きなのか。うまく説明はできないが、「ただ好きなのだ」というのが

一番近いだろう。空前絶後のグループなのだから、それでいいような気もして開き直っている。

思えば、音楽とは不思議なものだ。昭和歌謡の魅力について、作家五木寛之氏が興味深いことを語っている（「文藝春秋」二三年十一月号）。

自身の経験として、北朝鮮の平壤で敗戦を迎え、収容所に入れられ、厳寒の冬を過ごした。地獄のような状況を耐え抜くことできたのは、みんな毎晩、昭和歌謡を歌ったからだ、と振り返っている。その時歌ったのは戦前に作られたセンチメンタルな歌ばかりで、明るい前向きな歌は一つもなかったという。当時の実感から「悲しい時には悲しい歌を」と今でも言うそう。悲しい歌の方がかえって勇気づけられるものだ、と。

そして、こんな持論を述べている。〈能や歌舞伎、茶道など伝統文化は数多くありますが、民衆の中に息づいている真の日本的な文化はと言われると、やはり昭和歌謡しかありません〉。同誌は識者らに「後世に遺したい昭和歌謡」を尋ね、「昭和万葉集」百曲を厳選するそう。

歌を巡っては、作家の城山三郎（一九二七〜二〇〇七）の逸話も興味深い。次女の井上紀子氏へのインタビュー（二

三年十月二十四日 朝日新聞)によると、紫綬褒章を辞退した時、こう言っていたという。

「僕は、戦争で国家に裏切られたという思いがある。だから国家がくれるものを、ありがとうございます、と素直に受け取る気にはなれないんだよ」

そんな父とカラオケに行った時、井上氏が驚いたのは「リクエストしたのが『月月火水木金金』と『海ゆかば』だったこと。軍歌はずっと避けてきたはずなのに、と思ったからです」と明かす。

「初めて聴いた父の軍歌は、歌うというより唱えるような感じで、声もかすがちで聞いていてつらかったです。なぜ、歌おうと思ったのか。聞いてみたかったけど、聞けませんでした」

「海ゆかば」をめぐるつては、評論家の鶴見俊輔(一九二二～二〇一五)も書き残している。

「私は『海ゆかば』という歌がとても好きなんです。それに対して脱帽するんだけど、同時に、対峙するのもそれなんだ」(『期待と回想』晶文社)。

戦後を代表する知識人に、一言では語れない思いを抱かせた「海ゆかば」。万葉集に出てくる大伴家持の長歌の一部に信時潔(のぶときよし)(一八八七～一九六五)が三十七年に曲をつけたものだ。

今から八〇年前、東京の神宮外苑競技場で催された出陣学徒壮行会では、雨中、行進する学生たちを見送る大観衆が歌ったという。七〇年生まれ私が聴いても、胸が締め付けられるような響きがある。

哀切な歌というと、民謡の、奥深い世界と通じるように思う。

何の因果で 貝殻漕ぎなろうた カワイヤノー カワイヤノー……しみじみと歌い出す鳥取民謡「貝殻節」は、貝を取る人の労作歌とされる。過酷な労働を担う人々を鼓舞したのだろう。「安来節」(島根県)も「江差追分」(北海道)もリズムカルでありつつ、どこか憂いを帯びている。

若い頃は感じなかったが、近頃はこうした陰影に富む民謡を聴くと、目をつぶり、どんな風土だったのか想像してしまう。

やはりブルーな歌こそ胸に染みて、そこにしかない人生を生きてゆく人を勇気づけるのか。

ビートルズ最後の新曲売り出しに際し、想いが巡った。彼らの紡ぐ繊細で、愁いを帯びたメロディはアイルランド民謡の影響を受けている、と聞いたことがある。

本を作る側から (8)

村瀬 謙介

(小取舎)

ちよつと仕事を詰め込みすぎていて残り少なくなつた年内は忙しい。以前この場所でも書いた、鳥取大学と、アトスペースからふるの仕事に加え、毎年秋に開催されるフクシ×アートWEEKSでの仕事や、あいサポート展の展示作業、さらには間にちよこちよここと入る講演依頼やコピーライターの仕事が圧迫し始めた。もちろんプライベートの予定もあるし、何より本業である出版予定が年内にまだ二冊残っている。同じ職場で仕事が多い、となるより、別ジャンルのタスクが入り混じり、切り替えにも一苦労する。もうこれ以上は無理かもしれない。

仕事には考える仕事と、頭を使わずできる作業的な仕事と二種類ある。同じ「仕事」というものであつても、後者の仕事があることでリフレッシュできる。音楽を聞きながらでも作業ができるので、その間、脳を休ませることができ

きる。このサイクルを組み込むのが重要だ。

本を作ると言つても、実際書いているのは著者の方なので、編集の仕事だけでそんなに頭使わなくても良いんじゃないのと思う方もいるかもしれない。某国民的アニメのノリスケさんのように、作家に原稿を催促するだけの日常ではなく、デザインもスケッチ・ユーリングも販売のことも考えながら、実際に手を動かしていく。最近思ったのだが、初稿から二校までの間が一番脳が疲れるかもしれない。体裁を整えながらページに文字を入れていき、本の内容のことも同時にチェックしながら制作していく。ここに必要なのは設計図だ。

デザイナーさんならわかると思うが、デザインソフトを立ち上げてから作る作品は大抵時間がかかる。なので事前にラフを描き、段取りをつけてからソフトを立ち上げ組み立てていく。建築と一緒である。本を作る場合もかなり正確な設計図を作る。行間や時間、本文や章タイトルのフォント、天地左右の空白の距離をミリ単位で設定していく。これをしておくとしない場合とでは作業時間がかなり違

う。ただ、この設計図を作る時間もかなり取られる。

*

ちよつと前に人から聞いて「ああ、そうだな」と思ったことがある。その方は、今時ファックスを使っている企業とは仕事したくないという。メールを送っても見もしないと愚痴をこぼしていた。それがなぜ気になったかという出版物業界ではいまだにファックスがかなり使われているということだ。そういえば小取舎の本とある書店で扱ってもらおうと問い合わせたところ、ファックスでしか受け付けないという店舗があつた。ファクシミリを持っていないので、書類を作つて、コンビニの複合機から先方にファックスする。しかし、音沙汰がない。問い合わせても対応が悪く、その書店には下ろさないことにした。どういうことなのだろう。別に使うなどとは言わないがファックスだけにこだわる理由はもはやないと思つている。「ファックスつて何ですか？」と新人社員が聞いてきたという話もある。アメリカの歴史博物館では歴史的遺産としてファックスが展示されている。世界から見ると日本がまだファックスを使っているのが異様だと思うそうだ。

*

フクシ×アートWEEKsの話。障がいを持った方によるアート作品を県内から集め、鳥取市中心市街地の店舗や空きテナントなどあらゆる場所で展示するイベントで、今年は一〇月二八日から一月二六日まで開催される。先日会場の準備に行った先が元定有堂であつた。中学生の頃、塾をサボつて通つていた、県外から帰つてきてからも頻繁に行つていた。その本屋に本が一冊もない光景。壁際の書棚を掃除をしていると、営業中は本にしか目に入つていなかったが、本がないことで書棚が素晴らしいことに気が付く。高さや奥行き、ガラス板を組み合わせた平置きのか。閉店後数ヶ月経つのにまだ感心させられるのか。

元定有堂は期間中、マスキングテープを使って制作された可愛い作品が並ぶ、ハルカ展「brilliant〜ブリリアント」の会場となる。

汽水のほとりから (32)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

「二〇二三年のいま、日本では人文学の評判は落ちるところまで落ちている。言論人や批評家にかつての存在感はない。有名な学者もほとんどいない。世に出てくる文系学者といえば、活動家まがいの極端な政治的主張を投げつける目立ちたがりの人々ばかりだ。SNSを開けば、文系はバカだ、非科学的だ、役にたたない、他人の仕事にケチをつけているだけだといった罵詈雑言が溢れている」。これは東浩紀の新作『訂正可能性の哲学』(ゲンロン)の一節である。が、同書はあくまで人文学の可能性を探っている。

東浩紀は90年代に東大で現代思想を学んだ人である。近年注目されている國分功一郎や千葉雅也よりも年齢は少し上だが、彼らのように大学には残らず、会社を起し、在野で活躍してきた。そして、日本社会のあり方について執拗に思索を続けてきた。冒頭に引いた人文学の衰退への悲観は、今の日本のリベラル左派の退潮への失望にもつながっ

ている。なぜリベラル左派は支持されないのか。

東は「弱者」の支援に反対する人はいないとした上で、今の日本の保守とリベラルの対立は、抽象的な主義主張の対立としてではなく、連帯の感覚の対立として捉える方が理解しやすいと述べる。どういふことかと言えば、保守は「わたしたち」のなかの「弱者」を救うことを主張する。言わば、共同体で連帯する。一方、リベラルはその姿勢を閉鎖的だと非難する。彼らにとつては共同体を優先させる発想そのものが反倫理的であり、したがって、「できるだけ広く「弱者」を捉え、国籍や階級、ジェンダーなどを超えた普遍的な制度を構築しようとする」と言うのである。

とはいえ、このような開かれた理念を持つリベラルも、

その自意識とは裏腹に、実は閉ざされた「リベラル村」をつくっているのが現状だとして東は次のように批判する。「保守は閉ざされたムラから出発する。リベラルはそれを批判する。けれども、そんなリベラルも結局は別のムラをつくることしかできないのだとすれば、最初から開き直りムラを肯定する保守のほうが強い。いまリベラルが保守よりも弱いのは、原理にまで遡ればそのような問題なのではないか」。中でも直接行動を取らないリベラルについては、眼前の具体的な「弱者」ではなく抽象的な「弱者」ばかり相手にし、理念を優先させているという批判を免れまい。

そこで、東は保守でもリベラルでもない第三の立場から「家族」という概念を提起する。彼は前作『観光客の哲学』（ゲンロン）において柄谷行人の四つの交換様式を用いてこれを説明していた。柄谷の四つの交換様式とは、A贈与、B収奪と再分配、C商品交換、D贈与の高次元での回復を指すが、東は家族という社会構成体はAに相当するとした上で、自分の説く「家族」はDに相当すると説く。すると、東の説く「家族」とは従来の所謂家族の高次元での回復を意味することになる。それは柄谷の交換様式Dを批判的に継承しつつ、その更新を目指す概念であるとも言える。

では、東の説く「家族」が高次元での回復を意味するのはなぜか。彼はこのたびの新刊で、主義主張に関わらず人は閉じた社会しかつくれないとした上で、「閉じた社会は、けつして構成員自身が思うほどには閉じておらず、じつはあちこちに穴が空いていて、逆行的な訂正可能性によってつねに開かれた社会への圧力がかけられている」と述べ、「リベラルな開かれにまっすぐ向かわなくとも、保守的な「閉ざされ」をたえず訂正し、再定義し続けることはできる」と説く。ここで東が説く「開かれた社会への圧力」とは、「公共性」を再定義（訂正）させる力のことである。

こうした力はどうな場面でも多く見られるだろうか。思うに、それは利他の場面だ。前にも書いた、今にも井戸に

落ちそうな子供の姿を見て心が動くことを「仁」の端緒と説く古代中国の孟子の話には、東の説く「家族」の三つの性格が看て取れる。自由意志によらないという強制性、同時に同じ場に居合わせるという偶然性、他者へと関係が開かれるという拡張性がそれである。その他者は共同体の他者とは限らず、強制性・偶然性によって外部へと及ぶ。それが「家族」が高次元での回復を意味する所以だろう。

実は『観光客の哲学』で東はこう述べていた。「冷戦後の左翼は、ばらばらな個人が自由意志でつくる新しい連帯（根源的民主主義）に期待を寄せてきた。けれども、なんども繰り返しているように、そのような連帯は同じ理由ですぐに崩壊する。自由意志で入った集団からは、自由意志ですぐに出ることが出来る。それでは週末の趣味サークルとかかわらず、まともな政治の基盤にならない」。「家族」は、こうした反省の上になつて生まれた思想である。それは、閉じていることで開かれた公共性を訂正（再定義）可能な持続性をもつものとして構想する共同体である。思うに、それはまたコミュニケーションの新たな形を探るヒントになろう。

沈みつつある国のほとりで

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

9月に入って、取引先のいくつかの業者から「萩原さんはインボイス制度の登録業者になっておられますか？」という問い合わせがあった。

「インボイス」。何のことか、ずっと分からなかった。テレビで「これでインボイスへの対応も万全！」みたいな経理ソフトのCMがやたら増えたなあ、と思っていたぐらいで、マスコミもとくに騒いではいなかった。

◇ ◇ ◇

退職した時、年金が満額支給の65歳ではなく63歳だったので、食っていくために、大山にあったログハウスを使った一棟貸しのゲストハウスと、長年の経験や人脈を使ったライター稼業でしのいできた。

倉吉税務署に「個人事業主」を届け出て、毎年2月はウンウン言いながらeタックスで青色申告をしてきた。驚いたこ

とに、eタックスに添付する「貸借対照表」について、市内のショッピングセンターでやっていた「税務相談」に行ったが、税理士なのにまともな「貸借対照表」が作れず、eタックスに跳ね返されて5回も往復した。

もとよりお金を払って税理士にお願いしたり、「弥生ソフト」などの経理ソフトを使えば、自分でやらなくても何となる。

だが、わが隠居後の商売は「年金の足し」なので、税理士を雇ったり、毎年ソフトの更新料を払うような規模ではない。鉛筆をなめなめ、電卓で収入と支出を足し算引き算、単純そのもの。それで十分な経理なのである。

◇ ◇ ◇

ここから本題である。

さて、「インボイス」とは何なのか。

ふつう、税務署に個人事業主として届け出ているんだから、新制度が導入された場合、「あなたもたぶん対象だから、今度からこうしてちょうだいね」という案内が一通でも届いていいはずなのに、なかったような気がする。で、あれこれ調べて、その「正体」に驚いた。

インボイスとはタックス・コードと呼ばれる登録番号が書かれ、消費税額が明示されている請求書のことだ。政府はこれを「適格請求書」と訳している。

かつて中曽根政権下であまりの不人気に廃案となった「売上税」というものがあつた。その時の「税額票」を横文字に書き直したものがインボイスであることが分かった。まるで「ゾンビ」みたいなヤツである。税務署で消費税の課税事業者として登録し、アルファベットのTから始まるコードを取得した瞬間、事業者は課税事業者となり、インボイス、つまり正規の適格請求書を発行する資格を得る一方、消費税の納付義務が発生する。

これまで年間売上が一千万円以下の中小零細業者は、消費税納付は「お目こぼし」、つまり「あんた方はまあ払わなくていいよ、たいした税収にもならないし、事務処理は煩雑になるし」ということだった。

中小零細業者にとって、売上の10%を消費税に払うことは、イコール収入の1割減、極めて重いものであることは言うまでもない。ところが罪作りなのは、インボイスを取得しなければ、取引先の方が消費税納付を負わなくてはならず、「おたくとはちよつと……」と取引を切られる可能性が出てくるのだ。



次の数字を見たら、もつと驚くはずだ。

対象となるのは、私のようなフリーライターのほか、フリーランスの翻訳家、作曲家、ジャズ・ミュージシャン、アー

チスト、デザイナー、ヴォイス・トレーナーなどなど数えきれない、政府資料によると、現在、消費税免税の約500万の業者のうち、160万業者が制度導入でインボイスに転換すると予想し、結果「2480億円の税収増が見込まれる」としている。

えっ、日本の消費税収って年間22兆円である。インボイスで増えるのは、そのたった1%！

たった1%の税収増のために、これから日本のサブカルを背負って立つかもしれない漫画家、新進気鋭のクリエイター、世界に向けてアートを発信したり、クリエイティブな仕事を担っている500万の業者が弱体化し、廃業におびえ、あるいは消滅していくかも知れないのである。

ちようど今、国会では岸田首相が「税収が増えたので、所得減税をしたい」などと得意げに答弁している。このインボイスのでたらめさを新聞メディアはほとんど伝えていない。新聞業界への軽減税率(10%でなく8%)で骨抜きされたのなら、これほど情けないことはない。

われわれは今、沈みつつある国のほとりに生きている。日々そう感じるようになった。

背と腹の話

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

背中では語るとか、親の背中を見て育つとか言うけれど……本の背というのも、なかなかどうして能弁である。

本の背は、基本的に、書名、著者名、出版社名が記載されていれば用は足りる。稀に、出版社名がない本も見かけるが（そういうのに限って、表紙や裏表紙にも載っていないと来ている。間抜けなのか、恥ずかしがり屋なのか）。

単行本は、概ね、そんなものであるが、文庫本になると、いささか事情が変わってくる。

書名、著者名は当然として、出版社名は文庫のレーベル名（叢書名）になる。整理番号（現在は大抵、著者別）が付き、最下部に価格が表示される。

レーベル独自のシンボルマークやジャンル分けのマークが付いたり、ジャンルを背色で表わすこともある。

かつて、文庫にジャケットがなく、帯にパラフィン掛けだけ、という時代があった。岩波も、新潮も、角川も、創元推理もそうであった。創元以外、各社は帯色でジャンルを分けていた。

岩波は、赤は外国文学、緑は現代日本文学、黄色は日本文学（古典）、青は思想、哲学、歴史、芸術、自然科学、白は法律、政治、経済、社会といった按配であった。その時の帯色が、現在の背下部の色分けになっている。

なお、同文庫にはごく一時期、山吹色の帯が出現したことがある。創刊五十周年の記念事業で、稀少タイトル四十点がまとめて復刊された際、この色が使われたのである。後学のため付け加えておこう。（この試みは評判が良く、その後、品切れ本の復刊が定例化することになる）

新潮は、赤が海外小説、黄が海外詩歌・評論・随筆、草が日本小説、青が日本詩歌等、それに白というのがあって、これが探偵・時代小説と、何とも新潮らしい。同文庫は、戦前の発足当初から、エンターテインメントを重視していて、江戸川乱歩なども入っていた。

新潮も、角川も、ジャケット掛けが変わって、色分はどこにも使われていないにも関わらず、「赤335」とか「緑121」といった具合に、長い間、整理番号として使われ

続けていた。

講談社は少々変わり種で、後発ゆえパラフィン時代はなく、ジャケツト全体の色でジャンル分けをしていた。

日本文学は緑、海外は橙、日本の人文・社会・自然は黄、海外は青であった。デザインはジャンル、タイトルを問わず全て同一である。その後、この色分けは本体表紙に移行し、ジャケツトは作品毎に別々のものになった。

後発も後発、光文社古典新訳文庫は、国別の色分けを採用している。緑は英米、青は仏伊、黄土は独、オレンジは露、桃はその他である。

色でなく、マークでジャンル分けしていたのが創元推理文庫。同文庫は、パラフィン時代から、この方法を採用しており（帯に印刷）、同社の特色と言ってよさそう。ファンも多いが、今はもう使われていない。

本格ミステリは「おじさん」、警察小説・ハードボイルドは「ピストル」、サスペンス・スリラーは「猫」、法廷・倒叙は「時計」、怪奇・冒険は「帆船」、SFは「SF」、ゲームは「ユニコーン」であった。

近年は、背色で判る仕組みに変わり、茶が英国系ミステリ、緑が米系ミステリ、桃が女性作家、青がハードボイルド・警察、黄が国内ミステリ、藤がSF、灰がホラー・ファ

ンタジーである。

面白い話があつて、ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』は、初めて文庫に入った時は、何と「SF」マークだった。その後、「猫」マークに変わり、「帆船」マークになるという、孟母三遷もかくや、というような変転を辿った。二転までは、他にも例があるが（ヴェルヌが「帆船」↓「SF」など）、三転はこの一冊のみ。（元のジャンルに出戻る例なら、他にもあるようだが）

ハヤカワ文庫は、当初、NV、SF、JAで出発し、それぞれに独自のマークとレーベル表記があつた。NVは単行本時代の四頭立て馬車（ブランドンブルク門上の彫刻）を踏襲、SFは人工衛星（であろう）、JAは火焰型縄文土器であった。その後、HMやNFが追加され、前者はhとmを組み合わせた記号、後者はタルキニアの有翼馬の浮彫であつた。

（続く）

鳥取あれこれ その八十七

内田 克彦（地域研究家）

同年十一月、第一二回全関西婦人連合大会を開催。歌子国際部委員長が次の通り発言した。 林 - 19 -

（承前）

一九三〇（昭和五）年四月、「第一回全日本婦選大会」が東京で開催された。全関西は、後援者として、大会席上で発表した挨拶文を、『婦人』第五号に載せている。

同年一月、第一一回全関西連合婦人大会を開催。鳥取県からは高橋さく子が発言しているが、出席者リストは掲載されていない。第二日目に第二回全日本婦人経済大会を開催。消費組合のことが話題に上り、高橋さく子が「婦人会員は、消費組合においては、実際どんな役割をしているか」との質問をしている。

一九三二（昭和六）年の『婦人』第一号に、「大日本連合婦人会」が、前年の二月三日に文相官邸で設立をみた、との記事が載る。『婦人』第二号には、二月四日に全関西の京阪神の理事会を開催、「全関西婦人連合会及びその構成分子である各府県連合婦人会としては大日本婦人連合会に加盟せず」と可決。

九月十八日の満州事変は戦争でなく、紛争に過ぎない、この紛争が不戦条約に抵触するものではないとの確信を得るまでには大変であつたが、遂に良心の判断によつてこの確信を得ることが出来た。

そして、国際連盟理事会宛の電文を朗読、可決され、直ちに打電することになる。

私共は満州事変が適当な平和的解決を見る日の一刻も早からん事を母性の立場より願つてをります、それには貴理事会が事の真相を明確に知り、なほ日本が今回の事変は不戦条約に抵触するものにあらざして正義と平和と共存共栄のためにいかに心を砕きつゝあるかを理解され、正しき解決への最良の方法を発見せられんことを望みます。

第二日目の第三回全日本婦人経済大会の記事の中に、鳥取代表の一名の写真が載るが、名前は不明。

石月静恵は、『戦間期の女性運動』の「第一章地域

女性運動の展開 一全関西婦人連合会」で、活動を三期に時期区分している。第一期は、一九一九～二四年、各地の女性団体の代表者が一堂に会することを主目的とした初期の活動期。第二期は、二五～三一年、第七回大会で女性参政権の獲得が要求として承認され、その後具体的な署名活動などが行われた婦選運動高揚期。第三期は、三二～四一年、非常時体制への協力期。

この第三期の初めの一九三二年三月に、大阪を発祥の地とする「国防婦人会」が誕生した。最近新装版が刊行された、川名紀美『女も戦争を担った』昭和の証言』（初刊は一九八二年）から引用する。

最初から「銃後の守り」を看板に出発した国防婦人会だから、軍との結びつきも強かった。

安田（せい）、三谷（英子）両夫人は会の誕生から三カ月たった風薫る六月、会を全国的な組織にするためわざわざ上京、陸軍省を訪れた。

その結果、二年後の四月には、東京の日比谷公会堂で大日本国防婦人会総本部の結成式がはなやかに行われた。

一九三二年一〇月、「日満婦人連合大会」が全関西婦人連合大会と満州国婦人連合会の共同主催で開催。

『婦人』一一月号に鳥取県連合婦人会の出席者名が次の通り載る。古藤敬子、濱田里子、小川たね、三島くに、小澤咲、西村ゆき、伊庭なを、後藤いと、小泉亀子、福島葉子、北村□□、武中尾乃子、保本本恭子。

さて、全関西とはなんであつたのか。『日本女性運動資料集成 第一巻』の編者でもある鈴木裕子は、その「解説」の中で、次のように述べている。

いわば婦人会関西連合大会とは、女性のデモクラシー学習の磁場をなしてきたといえよう。年一回の大会は、その学習の成果を披露する場であるとともに、地方から上阪してくる婦人会代表が中央のデモクラシー的空氣を吸いこみ、その空氣を郷里に持ち帰るものとしてあつた。

これまで専ら『婦人』を参照しながら記述したが、今後鳥取県の婦人の動向をもっと調べる必要がある。

八代日記

(四十二)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

十月某日

「つぶろつく2023」に出演するため名古屋へ。つぶろつくはKDハポンと、そのすぐ斜め前にあるデイトリッブというライブハウスの二箇所で行われた十数組が出演するライブイベント。

ハポンにも長いこと世話になっておりとても好きな会場だ。仕事に疲弊し切った心で鶴舞駅に到着し、ガード沿いをハポンに向かって歩いていたらなんだかうちに帰ってきたような気分になって涙が出てきた。いつもありがとうハポン。出演者の方々と顔合わせののち、顔合わせには間に合わなかったメンバーたちと合流し、少しスタジオに入って練習する。練習後に自分たちの出演まで他のバンドを見て楽しむ。

前号に書いた角田さんのバンド、ピラミッドが相変わらず素晴らしかった。やはり今回もベースリストの彼女がすご

かった。

長いこと世話になっている割にはこれまで全然お客さんと呼べない我々であつたが、今回は大勢に来ていただき、かつみなさん踊りまくっており、端的に最高だった。またすぐ来たい。

またも会場打ち上げにて最後まで飲んでいる我々であつたが、ながつちりもあんまり酔いやないかもなど思い始めた。が、ケバブを聴いてくれた人たちと、ケバブ以外の音楽の話をするのがとても楽しいものだからやめられない。趣味があつたり、知らない音楽を教えてもらつたりするのはとても感動的なことだと思う。そういうのはもう古いのかなー。そうかもなー。

ハポンのメニューにカンパリがあつたのでカンパリのソーダ割りを延々と飲んでしまった。ハポンはお酒も食事もおいしいのです。

十月某日

インフルエンザに罹った。毎月のように病氣のことを書いていっているような。一週間ほど前に次男、その数日前に妻が、その直後に長男が熱を出したが三人ともあまり症状が重くなかつたので病院にいかずに済ませてしまったのがいけなかつた。強烈な肩こりと足の筋肉痛に見舞われてのち3日

間高熱を出して寝込んだ。会社を休まなければならなかったのに精神的にはかなり休息できたが・・・。タミフルではなくイナビルとかいう吸引する薬を処方してもらったが効いたのかどうかよくわからなかった。以前タミフルを処方してもらったときは劇的に効いた記憶がある。タイミングとか相性なのかな。インフルエンザのせいで鼻炎がこじれて毎日鼻水が苦しいのとアレルギー性の気管支炎で咳が止まらなくなってしまった。インフル明けは全然仕事も休めず不調だ。

十月某日

八代市全国花火大会。球磨川河川敷にて出張販売。間近で花火を見られるのは幸運なのかもしれないが、なかなか商売がうまくいかずかつ気温がグツと下がった日だったので心身ともにダメーシを被る。咳が悪化。

十月某日

長男が「うっせえわ」とか言う曲をずっと聴いているのだがメロディが鬱陶しく、歌詞が凡庸すぎて辛い。人気の曲らしいが、なぜなんだろう。

一方で同じく長男が聴きまくっているYOASOBIという人たちの「ツバメ」という曲はとても良い。

そして次男はYMOの「君に、胸キュン。」が大好きとのこと。僕も大好きです。その流れでYouTubeでYMOを色々観た。93年の再結成時のライブ演奏を初めて聴いたのだけど初期テクノ感が今っぽいのと、トリオでの生演奏が結構フィジカル要素が多く、とても良かった。DVD買ってしまったそう。

十月某日

こどもたちと一緒に『スパイダーマン…スパイダーバース』の続編を観る。素晴らしいクオリティ。しかも途中で終わった！続きは来年らしい。こどもとは吹き替え版でしか観れないから字幕版も観たい。

十月某日

ついに来たオタール・イオセリアーニのブルーレイボックス第1集。こどもと音楽の趣味とか漫画の趣味とか共有したいとは別に思わないけれどこれは楽しく観てもらえるとうれしいと思う。

遠い「他者」を思う

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

二〇一五年。大学在学中にトルコへ留学した時、旅行した中で記憶に残った国のひとつが、イスラエルだ。

トルコというのは、ヨーロッパにも中東にもアクセスがよく、イスタンブール空港はハブ空港としても知られている。トルコ留学をした留学生仲間内では、イランやヨルダンに行く人も多くいたが、結果的に私が中東の国で旅をしたのは、イスラエルだけである。

ハイファに交換留学した日本の友人がいたので、彼女に会う前に、テルアビブ、エルサレム、ナザレなどを一人で訪ねた。壁に囲まれたエルサレムの旧市街を歩きながら、日本人がいわゆる中東、アラブをイメージするときの典型的な街並みはこれだなと思った。(地中海側に面した千年の都、イスタンブールは、緑豊かな港を有した街である。よく期待を裏切ってしまう。)

エルサレムには、キリスト教徒も、イスラム教徒も、ユ

ダヤ教徒も、聖地巡礼としてやってくる。おかげで街を回るのは容易い。いきなりガイドをしてぼったくる輩もいるので、それなりに観光地化されているのだろう。ホテルの従業員の英語は流暢で、自分の方が下手だった。(これも、トルコの気持ちで伝えるようなサバイバル英語の雰囲気とは違う。)普段は食事には気を遣わずに旅行していたのだが、イスラエル風の朝食が美味しかったことが記憶に残る。

市街地には、教科書で見たような場所が広がっている。ユダヤ教の嘆きの壁。イスラム教のアルアクサ・モスクは、青天の中で美しい青い壁が映えた。キリストが磔にされたゴルゴダに建てられたと言われる聖墳墓教会。これもあれも、見たことはあった。写真を通して見たあの場所が、目の前に広がっている。

一方で、各宗教の聖地は物々しい警備がされていた。モスクでは、入り口を間違えて、銃を構えた警備に止められたこともあった。(当時の私は客引きに止められないために、耳栓をしたかのようにシャットダウンして歩くことに慣れてしまっていたのが原因だと思う。よくない観光客である。)

カトリックの学校に通ったものの、信者ではない、つまり、いずれの宗教の当事者でもない私は、エルサレムの歴

史が何層にも塗り重ねられていることに、痛く感銘を受ける。そして、それゆえの争いすら、この地の糧になっていることの重さに、辟易してしまった。

私の留学生仲間が多くが、パレスチナの支配するガザや西岸地区も旅の最中に訪れており、その環境の差に驚いていた。一方で私は、女一人旅ということもあり、そこまで訪ねることはできなかった。

イスラエル、パレスチナ。

おそらくしばらくこの問題を考えることはなさそうだと、中東問題に関する本を売ってしまおうかと考えたところで、ハマスとイスラエルの間の衝突、ガザへの空爆という一連の出来事が起きた。

私が国際平和のために活動することも、紛争解決のために国際機関で働くことも、おそらくはない。そこまで過酷な現実に向き合う覚悟も、体力も、自分にはないだろう。私個人には。それでも、それを日常から助けることができるのではないだろうか、かすかな希望を持って今の仕事をしているところがある。誰か別の人に、将来に、託すことができるかも知れない。

「非暴力コミュニケーション (NVC)」を提唱するローゼンバーク氏は、イスラエルとパレスチナの紛争に介入したケースについて、著書『人と人との関係にいのちを吹き込む方法』（日本経済新聞出版）で語っている。家庭内の不和から、国際関係まで、さまざまな紛争に関わる彼だが、果たして、これは魔法のコミュニケーションなのか？

それは本にまとめられている以上のことで、簡単ではないだろう。平和というのは、甘ったるいものではなく、静的な状態でもなく、絶え間ないプロセスである。そして、それは「聞く」ことから、「聞かれる」ことから始まる。異なる文化の間で、対話する道を探すこと。それが、私が「他者」に対して責任を果たすひとつの方法なのかも知れない。

「イスラム嫌悪」という概念に出会った大学時代の私は、イスラム教徒の世界に触れて見たいと、一年間のトルコの生活を選んだ。中東、アラブ、イスラム教、テロリスト、危険。雑多なイメージの集合だった。しかし、訪れたエルサレムでは、元気に走り回り、遊ぶ子供たちがいた。彼らに、神のご加護を。

アニバーサリー



ドラメラア (座敷わらし)

勤務校の周年事業であわただしい秋だ。まだまだ半袖で過ごせそう、と思っているうちに嵐に巻き込まれ、気がつけば冬は間近。先日式典が無事に終わってほっとひと息ついたけれど、先は長い。年度末に完成予定の刊行物が刷り上がって納品されてきてようやく、「ああ終わった、やれやれ」と実感が湧いてくるのだろう。

振り返ってみると、いい加減長くなった鳥取生活ではあるが、ちょうど大きな周年事業にはかち合わずにやって来ていた。初任校の百周年は異動の翌年だったし、前の職場の三十周年も同じく翌年。節目の年を目前に後ろ髪を引かれつつ去った、と表現したほうが印象は良いだろうが、するりするりとうまいこと大波を避けてきたと言うのが実感に近い。

しかし今回は波が大きく、あえなく飲み込まれることになった。まさかOBどころか鳥取出身ですらないのに、歩みを振り返る展示を担当することになるとは。上下巻物の年史の稿本をめくり、古い画像を求めて資料室の棚を隅か

ら隅まで探した。前提知識の無さが致命的なアウエー戦だった、が、なかなか得がたい体験であったのは確かだ

そういえば高校時代に何か式典があったような気がするなあ、となげなく検索してみておどろいた。なんと母校は在学中に記念すべき百周年を迎えていたようだ。たしかに大がかりなイベントで、もう顔も名前も覚えていない来賓達から、希望、未来、羽ばたけ、と発破をかけられたような覚えがある。……この程度の記憶というのが何とも。今回の式典の前日、「明日は何があるんすか」とのんびり聞いてくる生徒もいれば、「先生大変ですね」と労ってくれる生徒もいた。彼らは、この節目の年をどう受け止めて、どう振り返るのだろう。数十年後に尋ねてみたい気がする。



・編集後記

更新を忘れて、気がつけば運転免許が期限切れ。うぬ、ハガキが来てないではないか！と思っていたら、年金通知の葉書と一緒に大事にしまっていました。ドラメラア (編集長)

本の寄贈。古田徹也『謝罪論』柏書房 (同社菊池明郎さん)。後藤正治『クロスロードの記憶』文藝春秋 (木元健二さん、週刊朝日時代企画) いずれも刺激的な本でした。奈良敏行 (発行人)